

明治のサムライ 広瀬武夫

その2

<講道館の華>

広瀬は紅組の屈指の勇将として驚くべき活躍を見せる。白組の勢いは強く、九名を残し、紅組は負け越し、広瀬他三名にしてとても紅組の勝つ見込みはなかったが、広瀬は黒帯5人を抜き6人目の二段馬場七五郎氏と熱闘15分、ついに引分けとした。結果は大將同士の決戦にもち込み、紅組大將は負けはしたものの広瀬の50分の奮闘は当時、講道館始まって以来未曾有のこととして大きな称賛を受けた。彼はこの試合の働きが評価され、その場で二段昇格を許された。その後、四段に進んでいたが、日露戦争で戦死後、広瀬を親愛してやまなかった嘉納治五郎は特別に二段を加え、六段位を贈った。その時、嘉納館長が死せる広瀬に与えた言葉が「忠勇と思慮とを天下に示し、講道館柔道の精神を發揮せり。よって六段を贈る」であった。彼は後に軍神と謳われる海軍軍人の模範であったが、柔道の名を天下にあげた「講道館の華」でもあったのである。



嘉納治五郎

<広瀬と山本権兵衛>

日清戦争後の海軍大臣は西郷従道であったが、この西郷の下で軍務局長として海軍省を一手に切りまわしていたのが、後の海相となる山本権兵衛少将（第11, 12, 13代海軍大臣、第16, 22代内閣総理大臣、第37代外務大臣を歴任）で

ある。その山本と広瀬の間には面白い話が残っている。当時山本には18歳になる娘がいたが、山本はその婿として広瀬と同期生であった財部彪（たからべたかし）を選んだ。

財部は海軍兵学校第15期主席の秀才で将来を高く期待されていた故、山本の眼鏡に叶ったのであろう。ところが財部は非常に悩んだ、理由は海軍きっての実力者の婿になってしまうと、以降自分の実力ではなく山本の七光りで出世したとの陰口をたたかれはしまいかという恐れであった。そこでその悩みを親友の広瀬に打ち明けた。二人は講道館の柔道仲間でもあった。友情に厚い広瀬は「よし俺が話をつけてやる」と単身山本の私邸に訪れた。

広瀬大尉は鋭い目つきの精悍（せいかん）そのものの虎のような面構えをした山本に物怖じせず単刀直入に言った。「私は財部大尉の級友であります。閣下のお嬢さんとの結婚のお話しについて伺ったものであります」、、、、と。山本は静かに広瀬の言い分を聞いた。「財部は人物、才能から見ても、ほっといても立派になれる。将来実力で立身出世したとしても、「あいつは山本閣下の婿だから出世したと陰口を叩かれるに違いない。そんなことになると、彼も我々も心外であります。如何でしょうか。できればこの際このお話はすっぱり破談になすっては頂けませんか」、と。物に動じない山本もこれには驚いた。だが真に級友のことを思つての直言を憚（はばか）らぬ広瀬に好感を抱いた。山本はその心配は無用と、親切に縷々（るる）述べたので広瀬は納得して引き下がった。



山本権兵衛

<ロシア留学>

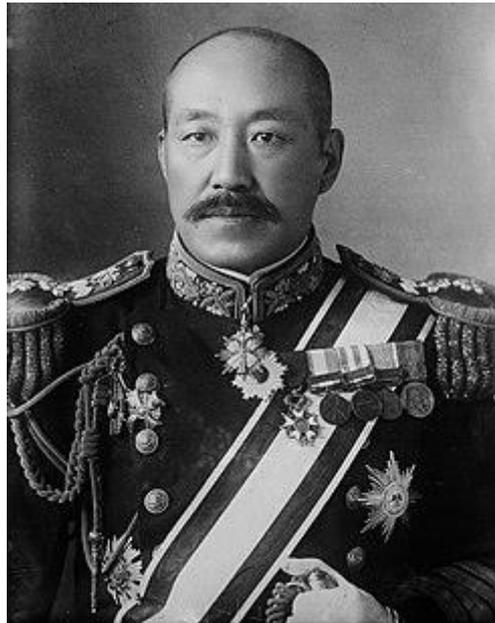
広瀬が山本を訪れたのは明治30年の正月だったが、この年の6月広瀬はロシア留学を命じられた。当時海軍省では、優秀な少壮・将校を英・仏・独・米・露という一流の海軍国に派遣して、学ばせていた。この年の留学生はイギリスに財部喬史彪大尉・フランスに村上格一（かくいち）大尉・ドイツに林三子雄（みねお）大尉・アメリカに秋山真之（さねゆき）大尉である。この四人はいずれも海軍兵学校首席ないしは二、三番で出た俊秀ばかりであり、ことにもその中でも秋山は秀才中の秀才、日露戦争では連合艦隊参謀として東郷平八郎の下で活躍したあまりにも有名な人物である。財部と村上は後に海軍大臣を務める。林大尉は日露戦争で戦死する。この五人の中でただ一人広瀬は秀才とはいいい難く、海軍兵学校の卒業成績は80人中64番目であった。普通この成績ではまず選ばれることはあり得ない。軍務局長の山本権兵衛はこの五人の候補があげられた時、前の四人には異存がなかったが、広瀬の64番には流石に躊躇し判断に迷った。だが海兵での学業成績こそ振るわなかったが、実技は抜群であり、海軍将校になってからの実地の勤務振りは一点非の打ち所のない満点であった。専門の水雷術の練習でも、同期生中一番の成績であった。その上人柄は衆にすぐれて申し分なく、部下も同僚も上司も皆、広瀬を親愛した。広瀬の居るところ、いつも春風が吹く暖かさと和気があった。それ故上官らが広瀬のロシア留学につき、極力推薦を惜しまなかったのである。山本は單身自邸を訪れた広瀬を思い起し「にやり」と笑って、採決の判を押した。

三国干渉が行われた時、日本は涙を呑んで屈伏したが、この時「臥薪嘗胆」を合言葉に、近い将来の対露戦の不可避を思わぬ軍人はなかった。そのあと、明治31年春、ロシアは旅順と大連を清国より租借した。日本に返還させた遼東半島の主要部をロシアは横取りしたのである。如何に憎んでも飽き足らぬロシアの傍若無人の横暴であった。広瀬は早晩干戈（かんか）を交（まじあ）うべきロシアに勇みに勇んで赴いたのである。ときに30才である。

<先輩・八代六郎>

時にロシアで広瀬を待ち受けていたのは、日本公使館付駐在武官の八代（やしろ）六郎少佐である。広瀬が海軍兵学校在学当時の学校副官であり、広瀬を弟の如く可愛がっていた。八歳年上の八代ではあったが、広瀬が最も敬愛し兄事（けいじ）する肝胆相照らす親友中の親友であった。八代は海軍の名物男の一人でもあった。八代は正直、剛毅で、しかも情に厚い俠気（おとこぎ）その

ものの男で、「俺は海軍兵学校に入れなかったならば侠客（きょうかく＝強い者をおさえ、弱い者を助ける任侠の徒）になるつもりだった」という、一風変わった男である。日露戦争では一等巡洋艦「浅間」の艦長として縦横の活躍をし、大いにその武名を挙げ、大正期には海軍大臣となり、やがて海軍大将にまでなった海軍有数の人物である。

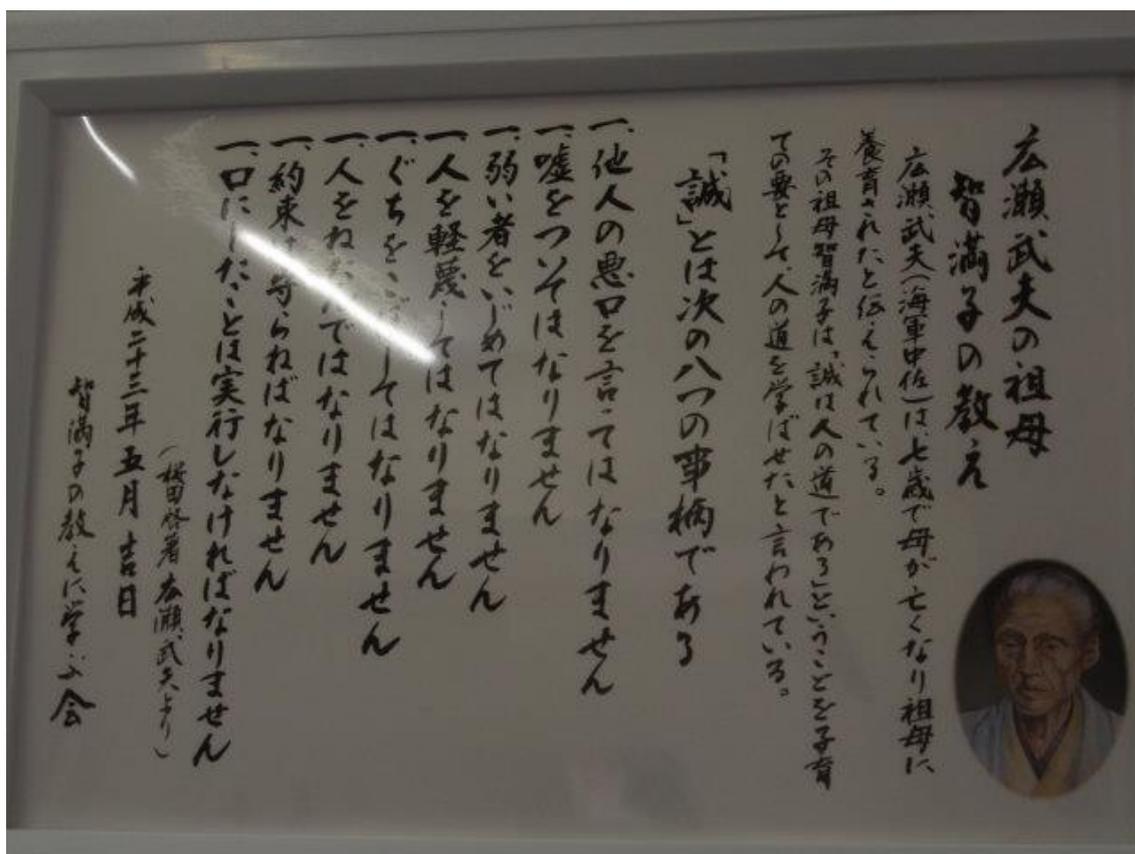


八代六郎

二人は実に気が合った。その信念心情において同質の人間であり、二人の共通の話題の一つは史上の英雄、名将、偉人についてであった。二人は大変な読書家であり、日本のものは言うまでもなく、「三国志」「漢楚軍談」、アレクサンダー、シーザー（カエサル）、ナポレオンそしてロシアのピョートル等それらの人物、業績等につき、毎日の如く飽きることなく論じ合った。二人の好きな人物は、日本では楠公父子、菅原道真、赤穂義士、二宮尊徳、西郷隆盛、吉田松陰、加藤清正、支那では公明、岳飛（かくひ）などだ。また共通の話題には柔道があった。海軍兵学校が築地より江田島に移った時、柔道を副課として取り入れることに尽力したのが八代と広瀬である。

八代はロシア語、ロシアの歴史、軍事、政治、外交、社会全般のことにつき、その知るところ全てを広瀬に教えた。ロシア語の勉強に余念のなかった広瀬に明治31年1月祖母の死という悲しい知らせが届いた。母を早く亡くした広瀬はこの祖母に育てられた。広瀬は悲嘆に暮れ毎日泣きあかした。日頃明朗そのものの広瀬が黙して語らず、夜もろくに眠れず、毎朝目を赤く泣きはらし

て出てくるのが10日ばかり続き、とうとう眼病にかかった。悲しみに打ち沈む広瀬に対して、ただ黙ってこの不幸と一緒に心より悲しんでいた八代はこれを見て忠告した。「広瀬もう泣くな。君には陛下がいらっしゃる。日本がある。悲しみ嘆くのはもつともだが、もし不二の眼病にでもなるならば、それこそ地下のおばあさんがお喜びにならんぞ」すると広瀬は夢から覚めたように、「本当にそうです。そうです」と答えてやっと立ち直った。これほどに広瀬はこの祖母を親愛していたのである。



広瀬記念館に展示されている広瀬武夫祖母の教え

ロシアの生活は先輩八代のおかげで順調だった。だがようやくロシア語の読み書き、会話がひと通りできるようになった明治32年春、八代は三年間の駐在武官の任をとかれ帰国することになった。広瀬にとっては、この兄とも師とも思い心服してきた八代との別れはつらかったろう。ロシアにやってきて実に肉親も及ばぬ手厚い世話をうけた。八代は広瀬にとり、軍人として人間としての手本そのものであったのだ。

＜ロシア人との親交＞

広瀬が、ロシア語が堪能になるにつれ、八代は幾人ものロシア人を紹介してくれた。紹介されたロシア人と親しく交わり、家族ぐるみの交際をするようになり、八代との別れの淋しさを紛らわすことが出来た。広瀬は誠実、明朗、快活で少しの邪気もない天真爛漫の人柄であったから、人種の壁を越えてロシア人からも親愛された。八代はこう言っている、「彼がロシア語を話せるようになった時、小生は知人にして小児多き人を彼に紹介しました。小児の彼に慣れ睦むは妙でした。怒れば猛獣も攝伏（しょうふく＝恐れ伏し）し笑（え）めば嬰兒（えいじ）も、はいまつわるとは彼のことでした」広瀬が特別な親交のあった一家にペテルセンがある。やはり八代の紹介によるものであった。家主フオン・ペテルセンはペテルブルグ大学医学部の教授にして博士であった。この一家は広瀬をまるで家族の一員のように歓待した。彼の長男で17歳のオスカルはすぐに広瀬になつき、あたかも実の兄のように敬い慕った。また博士には21～22歳になるマリヤという娘がいたが、彼女もまた広瀬の純朴な人柄に惹かれ、いつしかひそかに恋い慕うようになる。



マリヤが広瀬の姪の馨子に送った切手帳

広瀬が親交を重ねたもう一つの家は、海軍大佐で貴族のコワリスキー家であった。コワリスキー大佐とはある園遊会で知り合ったが、大佐は一目みた時から好感を持った。大佐には海軍少尉の長男、海軍生徒の次男、それにアリアズナという23歳の娘がいた。



アリアズナ

広瀬はしばしば招待されて、ここでも家族同様、暖かな「もてなし」を受けた。ある日大佐邸でロシア海軍の上級将校を招いての晩餐会が開かれ、広瀬も特別に招待された。大佐は広瀬を丁寧に紹介し「武術の達人」と言い副えた。宴たけなわになり広瀬の柔道のことが話題に上った時、大佐は興に乗って、「柔道の名手たる広瀬君に誰か相手をしてみませんか」と誘いをかけた。するとその中では若い方に属する腕に自信のある大男の将校が、「では私がお相手しましょうか」と進み出た。一同は興味津々、二人を見つめた。やむなく相手となった広瀬は一瞬のうちに、もの見事に一本背負を決めた。大男の将校はあっけにとられ、信じられないという顔をした。広瀬びいきのコワリスキー大佐夫人などは踊り上がって喜んだ。また部屋の片隅では、そっと娘のアリアズナが息をひそめて、この立合いを見ていた。

ロシアに於ける広瀬の武勇伝は多い。ある時ロシア海軍省で将校等と雑談していると、相手が日本人は、団体としては強いかもしれないが、個人としては弱少で、とうていロシア人の敵ではないと放言した。広瀬は直ちに言った、「あなたの言が真か否か、事実を以て試そうではありませんか。貴国軍人中、腕力の最も優れたる三人を選んで、私と対戦しましょう」と。かくして海軍省

の広場で大勢が見守る中、広瀬は苦もなく三人を投げとばした。ロシア皇帝はさらに強いレスラーを選んで御前試合をさせたが、これも広瀬の敵ではなかった。広瀬武夫の名は一躍、露都に轟き渡った。こうして広瀬はロシア人との親交を一層深めてゆき、ペテルセン・コワルスキー両家の人々とは益々親しみを増してゆくのである。

次は有名なアリアズナとの悲恋と軍神広瀬の壮烈な戦死で、終わる。

平成29年3月30日

志雲会塾長 有馬正能